

受 賞 者 紹 介

<担い手育成部門>

かとう せいいち
加藤 誠一

<農業・農村振興部門>

さんちきょうぎかい
れんこん産地協議会

<農業教育・技術者部門>

ふじい きよし
藤井 潔

担い手育成部門



豊田市

加藤 誠一

加藤誠一氏（以下、加藤氏）は、昭和 50 年に地元の JA に就職し、農業機械の整備・販売、グリーンセンターでの仕入れ・販売等を担当し、地域農業の振興に努めた。平成 20 年に JA を退職し、松平地区で生産実績のある夏秋ナスとセンリョウを栽培品目に選定して就農した。現在は、妻と 2 人でナス栽培 7a、ナンテン栽培 12a の経営を行う農業者である。

JA あいち豊田なす部会(以下、なす部会)は、定年帰農者、地域の農業研修施設や県立農業大学校の研修修了生等を受け入れ、ほぼ毎年新規就農者が加入している。その結果、産地規模を維持する一方で、栽培経験が少ない生産者が多く、平均単収も県内他産地と比べて低いことから、新規就農者の栽培技術向上が部会の課題となっている。

加藤氏は、優れた栽培技術を持ち、それを惜しみなく地域のナス農家に伝えている。指導にあたって大切にしている言葉は、山本五十六の「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」で、「実演すること、実際にさせてみることを、できたら褒めること」に重きを置いている。これまでに重点的に指導したナス農家は 15 名で、現在ではうち 10 名が部会に所属し、産地の出荷量の 23%を占めている。また、部会活動の活性化にも熱心で、芽摘み講習会の開催や栽培技術伝承動画の作成等にも意欲的に協力している。加藤氏が積極的に発言することで、他の農家同士も自由に意見交換し、教え合う機運が醸成されている。

以上のように、加藤氏は地域のナス産地の発展のために尽力してきた人物で、地域の農業者からの信頼も厚い。加藤氏の優れた指導力は、豊田市・みよし市の農業の振興・発展に大きく貢献し、その功績は極めて大きいことから、推薦する。

農業・農村振興部門



愛西市

れんこん産地協議会

愛西市、特に旧立田村・旧八開村は古くからのレンコン産地で、中京圏の市場における「泥付きれんこん」は地域ブランドともいえる存在感がある。しかし、この産地はＪＡによる共選共販の出荷組織の他、地縁的な集団や出荷先ごとにレンコン生産農家がグループ化した小集団によって形成され、それぞれに生産や販売等に特徴を生かした経営を行ってきた。一方、生産性や販売力等において一体的な産地規模を生かしきれていないという側面も有していた。出荷組織の生産面積・出荷量構成は、ＪＡあいち海部「海部れんこん組合」が６割、その他グループが４割である。この比率は長らく変化していないものの、生産者の高齢化や後継者の不足により、産地全体として減少傾向が継続していた。

個々の力では解決が難しい産地の状況に対して危機感を持った生産農家たちが、中京圏でのレンコン需要に 대응していくために、所属組織（出荷組織や小集団）の枠組みを超えて横断的に産地の維持と今後の発展に取り組む「れんこん産地協議会」を設立(2019年)した。この組織の役割は産地の問題を明確に絞り込み、それぞれに関係機関の支援を得つつ課題に取り組み、その成果を産地全体で共有をして全体のレベル向上を図っていくところにある。新技術導入に伴う適性品種の選定検討・管理作業の省力化等には、試験展示から実証展示、さらには拡大展示へと手順を踏み、着実にスマート農業技術など軽労化に係る技術を現場の生産農家に落とし込むように工夫している。その結果、広く産地の生産農家に情報共有がされ今後技術の普及拡大がさらに進んでいくことが期待されている。

新規参入者の確保では、国の補助制度を活用した研修組織を立ち上げ、受入体制を整備することや、就農間もない若手生産者を組織化してお互いに研鑽する場を設けて、個々の能力の向上と同時に若手生産者たちの「やる気」を通じて産地の活性化につなげる活動を展開しつつある。

この協議会の活動により、産地の栽培面積及び出荷量の減少に歯止めがかかり、若手生産者の経営意欲の向上を促すことで消費者、市場のニーズに応えられる状況となった。

このように「れんこん産地協議会」は、従来の出荷組織等にとらわれず産地の抱える諸問題解決に向け課題に取り組み成果をあげ、産地の維持とこれからの発展に向け産地振興に寄与している。

農業教育・技術者部門



岡崎市

藤井 潔

愛知県は小麦の作付面積が 5,500ha を超える本州有数の小麦生産県であり、水田転換畑で生産されている。2010 年ごろまでは「農林 61 号」を主に作付しており、湿害や梅雨による降雨の影響を大きく受ける等、小麦単収は全国平均に達しなかった。加えて、同品種は日本麺用であるものの、食味や外観等の麺品質が不十分であった。このような中、生産者からも実需者からも、安定多収で品質に優れる県産の日本麺用小麦品種が強く求められていた。

愛知県は 2001 年度～2010 年度まで、「農林水産省小麦育種指定試験地」として東海地域の水田転換畑に向く早生・多収・良質で耐湿性に優れる小麦品種の早期開発に取り組んだ。その中で藤井氏は、「指定試験地主任」として、圃場整備も含めた小麦育種設備の整備と品種改良事業へ主体的に取り組んだ。

育成者らは、2001 年春に製麺特性が良好で「やや低アミロース含量」の「きぬの波」を母、早生で耐湿性と収量性が高く「低アミロース含量」の「西海 184 号」を父として交配した。藤井氏は、従前携わっていた水稻育種で得た知見に基づき、育種目標を達成するよう先頭に立って業務に取り組んだ。その際、DNA マーカー選抜により、「きぬの波」の持つ生地物性を強めるグルテニンサブユニット遺伝子 Glu-B3g の導入固定に成功し、生地物性を強める遺伝子を集積した。2006 年に「東海 103 号」の地方番号を付名し、2009 年に品種登録出願、2010 年に愛知県の奨励品種となり、2011 年に「きぬあかり」として品種登録された。

「きぬあかり」の普及前には小麦単収が全国平均にも達しなかった愛知県が、「きぬあかり」の普及定着が進んだ 2018～2020 年の 3 年連続及び 2022、2023 年に日本一の小麦単収となり、「きぬあかり」の開発・普及・定着が愛知県での飛躍的な小麦単収の向上に大きく貢献している。ひとえに藤井氏ら育成者が、愛知県小麦生産の環境特性を十分理解し、かつ実需者を含めた関係者からの要望を取り入れ育種に取り組んだ結果である。

現在、「きぬあかり」は愛知県内で 80%の作付シェアを占め、本県育成の硬質小麦「ゆめあかり」と合わせて小麦栽培面積の 100%に普及し、稲麦大豆を主体とする水田作経営者の経営の大黒柱となっている。静岡県でも奨励品種に採用され単収向上に寄与している。

藤井氏が開発に関わった「きぬあかり」において、愛知県での飛躍的な小麦単収の向上により生産者、実需者への貢献は非常に高い。また、真摯に育種に向き合い、挑戦を続けてきた姿勢は研究者の規範となっており推薦に値する。